



担当者（担任）が考える自然学校

前回のNO, 28に引き続き、10月22日の本校開校20周年記念シンポジウムでのパネルディスカッションで、三田市立松が丘小学校の松本先生に5年生担任としての立場から意見をいただいたものを、インタビュー形式でまとめてみました。松が丘小学校は、平成23・25年度の利用校で、自然学校を総合的な学習の時間に位置づけて実施されています。



Q：自然学校プログラムを作っていく上での「こだわり」は？

A：私は、自然学校を行う土地ならではの自然を味わうようなプログラムを作っていくということにこだわっています。子どもたちの総合的な学習の時間として、設定するテーマは、ここで実施する場合は、「但馬の魅力をさぐる、味わおう、伝えよう」という形で学習を1年間通して進めています。

Q：どのようにプログラム作りをするの？

A：私の実践では、子どもたちが但馬について調べた情報をいっぱい持ってきますので、できるだけ多く採用させたいという気持ちがあります。私は、無駄をなくしてできるだけ多くの体験をさせるための工夫について考えています。工夫の1つ目は、事前指導の充実です。子どもたちが調べてきた情報を、5年1組流但馬の魅力ベストテンとか、そんな感じでまとめていきました。そのランキングが、プログラムを作っていく際の優先順位となります。子どもの思いだけでなく、教師側の「これを体験させたい」と思いもあり、それらをすり合わせています。討論する時はやりたいではなく、やるべきという形で話し合わせています。やるべきで話し合わせることで、そのテーマであったり、自然学校のためであったり、それらをつなげて考えるようにしています。「めあて」であったら、自分たちの力を合わせて、絆とか言葉と結びつけながら、こういうことをやるべきだと子どもたちは考えて討論していきます。このように、討論することで、その活動をする必然性も生まれますし、意欲も高まっていきます。その結果、実際に活動している時もはっきりとした目的意識を持って動いていきますので、無駄な時間が少なくなったと思います。2つ目は、出前講座の活用です。3つ目は、活動と活動の連続性のあるプログラムです。連続性のあるプログラムにすることで、子どもたちの意欲、意識も連続してやっていけて、次の活動にさっと入っていただけます。

Q：自然学校では、どんな活動をしたの？

A：竹伐採からの「竹の多様な可能性を追求した自然学校の実践例」を紹介させていただきます。南但馬自然学校での事前説明会で、私自身が木を伐採する経験をしました。これは、価値ある体験であったと感じ、ぜひともこれを入れたい、と私自身思いました。学校に帰って、竹を切り倒すこともできることを子どもたちに話すと、「やってみたい。やろう、やろう」というようになりました。切った竹をどう使うのか、子どもたちは、保護者にインタビューしたり、インターネットで調べたりとか、色々調べ始めました。色々な情報の中から、みんなで協力しないとできないこととか、南但馬自然学校のフィールド



でしかできないこと、そういったことを子どもたちがやっていくことになりました。味わい方の1つ目は、竹伐採です。全く経験が無いので、全員が1回はのこぎりで切って枝を打って運んで行きます。2つ目は、竹筒飯盒です。これは、各班2つ作りました。全然焦げずに、おいしく、竹の香りがついたご飯が炊けました。3つ目は、お箸です。4つ目は、竹オブジェ、花台です。これは、子どもたちから出てこなかったんですけど、JR竹田駅に似たようなものが置いてありまして、こんな面白そうだと思って写真を撮って、子どもたちに「こんなんできるよ」と言いました。5つ目は、但馬の魅力を味わうそーめんではなく流しおそばです。6つ目は、バームクーヘンです。7つ目は、竹細工でできた竹くずを野外炊事での焚き付け用に使ったことです。8つ目は、竹筒飯盒は洗わずに、このままキャンプファイヤーで燃やしました。9つ目は、「作ったで 世界で1つの ぼくのはし」等の自然学校カルタを作ったことです。味わい方の最後は、学校に帰ってから、子どもたちが作ったネーミング「但馬の魅力体験屋台」です。それぞれのお店を作って体験したことを疑似体験してもらい、そんなお店です。4年生以下の子どもたちや保護者の方々に、自然学校での様子を十分に伝えることが出来ました。



Q：自然学校の問題点・課題は？

A：教師の指導性が発揮されていない自然学校、言い方が悪いかもしれないけど、リーダーに乗っ取られた自然学校もあり、それでいいのかと思っています。教師が自然学校を通して子どもたちにどんな力をつけたいのか、その力が今後の学校生活にどのように生きていくのか、具体的に指導していくのが、大切ではないかと考えています。そこで、重要になるのが、指導者間での打ち合せです。自然学校が始まる前に、参加する教師、リーダーと一緒に自然学校のねらいと指導方針を共有しておく必要があると思います。それから、毎晩、指導者が集まってプログラムの打ち合せをしますが、プログラムの細かい動き以前に、自然学校のねらいの達成状況を振り返って、明日の指導方針を決めておく必要があると思います。教師もリーダーも同じ方向を向いて、子どもも同じような意識を持つことで、ただ単に楽しかったということだけでなく、どれだけ成長したかと思えるような自然学校になるんじゃないかと思っています。

Q：今後の自然学校の在り方は？

A：自然学校が終わって単に楽しかったで終わるんじゃなくて、成長した、やり切ったという思いになるような自然学校にしたいなと思っています。そのためにも、子どもたち自身で作っていく自然学校にしたいなと考えています。子どもたちとすり合わせながらプログラムを作っているのでも、毎年、毎年、違う中身になります。子どもが違うんで、そこもまた楽しいところです。もう一つ、子どもたちの自然学校中の暮らしについても、子どもたち自身で高めていくことを大事に考えています。事前学習の中で、4泊5日の生活の中で必要なルールやマナーを子どもたちに見つけさせて、それを自然学校のしおりの中に取り込んで、毎晩、振り返りを行うようにしています。個人で振り返り、班で振り返り、クラス全体で振り返ります。クラス全体で振り返った時には、クラスの課題も浮かび上がってきますので、それを解決に導くような形で、明日の目標という形で、子どもたち自身でまとめていくようにしています。その目標を画用紙に書いて、それを翌日の活動場所に持って行って、意識付けをしています。活動も自分たちで作って行って、くらしも自分たちで高めていくことで、自分たちで作りに上げた自然学校を送るようにしています。

編集後記

松本先生の綿密な計画のもと、子どもたちが主体となって自然学校を作り上げています。事前、実施期間中、事後とそれぞれの指導は大変ですが、それらを忘れさせる子どもたちの成長が一つの励みとなり、先生の頑張りの源になっています。 (文責 主任指導主事兼指導課長 北條 勝也)